

# 結婚満足度に及ぼす親密度と葛藤解決方略の影響

—台湾における夫婦の場合—

林 安文・深田博己・児玉真樹子・周 玉慧

Influence of intimacy and conflict resolution strategies on married couple's marital satisfaction in Taiwan

Ann-wen Lynn, Hiromi Fukada, Makiko Kodama, and Yuh Huey Jou

本研究は、台湾の夫婦を対象に、親密度が葛藤解決方略に及ぼす影響を考慮しつつ、親密度と葛藤解決方略が結婚満足度に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。親密度から結婚満足度へ直接影響を及ぼすパス、親密度が葛藤解決方略を媒介に結婚満足度に影響を及ぼすパスが見られると仮定した。郵送調査を実施し、台湾の夫婦173ペアの有効回答を得た。このデータを分析した結果、夫・妻ともに、親密度が結婚満足度に直接影響することが確認され、仮説は支持された。また、夫に関しては、葛藤解決方略のうち、統合方略の使用の促進を媒介して、結婚満足度に正の影響を及ぼすことが、妻に関しては、支配・攻撃方略の使用の抑制を媒介に結婚満足度に正の影響を及ぼすことが確認され、仮説を支持する結果となった。一方、妻の結婚満足度に対しては、夫の葛藤解決方略のうち、第三者介入方略からの負の影響力が確認されたが、夫の結婚満足度に対しては、妻の葛藤解決方略からの影響力は見られず、この仮説は一部支持されなかった。

キーワード：結婚満足度、親密度、葛藤解決方略、夫婦、台湾

## 問 題

### はじめに

近年台湾では離婚率が上昇している。台湾内政部の統計資料によると、1990年には1000人中7.1組が結婚し1.35組が離婚したが、2001年には1000人中7.5組が結婚し2.5組が離婚した。これより、近年、結婚生活に満足できなくなり、婚姻を維持することが難しくなった夫婦が増えていると解釈できる。

Lemieux & Hale (2000) は、結婚満足度を予測する1つの要因に夫婦の親密度を挙げている。また、Kurdek (1995) は、葛藤への対処方法、すなわち使用する葛藤解決方略によって結婚満足度が影響を受けることを明らかにした。そこで、本研究では、夫婦の葛藤解決方略の使用および親

密度と、結婚満足度との関連を明らかにすることを目的とする。

### 親密度と結婚満足度の関係

親密度が結婚満足度の規定因であることを示している研究として、Lemieux & Hale (2000) がある。この研究では、愛情の3要素（親密度、情熱、コミットメント）と結婚満足度の関係を検討した。その結果、夫においても、妻においても、三つの要素と結婚満足度との間に正の相関が見られた。また、結婚満足度を目的変数とし、三つの要素を説明変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）の結果、夫においても妻においても三つの要素から結婚満足度への有意な正の影響力が確認された。

以上より、本研究では、親密度を結婚満足度への影響要因として扱うこととする。親密度が高いほど、結婚満足度も高くなると考えられる。

### 葛藤解決方略と結婚満足度の関係

夫婦間葛藤は対人葛藤の一形態である。対人葛藤とは人々間の利害や意見の対立・不一致のことで、個人目標が他者の行動によって妨害された状態と定義される（大淵，1991）。以上より、本研究では夫婦間葛藤を、生活の中での出来事や状況に対して、夫婦間に認識や意見の一致がみられない状態と定義する。また、葛藤解決方略とは、葛藤に直面する時、個人が解決を試みる行動である（福島・大淵，1997）。

Kurdek (1995) は、夫婦の葛藤解決方略とそれぞれの結婚満足度の関連を検討した。その結果、二人の葛藤解決方略は本人のみでなく相手の結婚満足度にも影響を及ぼすことが判明した。具体的には、夫の回避方略（withdrawal：黙り込む、身を引くなど）の使用頻度が高くなると夫および妻の結婚満足度の両方が低下し、同様に妻の回避方略の使用頻度が高くなると夫および妻の結婚満足度の両方が低下した。さらにこの研究では、夫と妻のそれぞれの使用する葛藤解決方略の交互作用の影響も検討し、いくつかの組み合わせで夫もしくは妻の結婚満足度に有意な影響力を見出した。

以上より、夫婦各々がどのような葛藤解決方略を使用するかが本人の結婚満足度のみではなく、配偶者の結婚満足度にも影響することが明らかになった。

### 親密度と葛藤解決方略の関係

Prager(1991)は未婚カップルと夫婦を対象として、親密状態と使用する葛藤解決方略の関連を、実験により検討した。その結果、部分的ではあったが、本人の親密状態と本人の使用する葛藤解決方略に関連があることが示された。

以上より、本研究では、本人の親密度を、本人が使用する葛藤解決方略への影響要因として扱うこととする。

### 研究目的

先行研究では、結婚満足度を規定する要因として、夫婦が使用する葛藤解決方略と夫婦の親密度

がそれぞれ個別に検討されてきた。また、先行研究において、葛藤解決方略に及ぼす親密度の影響が明らかになった。そのため、親密度、葛藤解決方略の結婚満足度への影響力を明らかにするにはこれら 2 要因を同時に説明変数として扱って検討する必要があるが、そのような研究はこれまでみられない。そこで、本研究では台湾の夫婦を対象に、親密度が葛藤解決方略に及ぼす影響を考慮しつつ、親密度と葛藤解決方略が結婚満足度に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

先行研究より夫婦間の葛藤解決方略、親密度と結婚満足度との間には図 1 のような関係がみられることが推測される。図 1 より、夫の親密度は直接的に夫の結婚満足度に影響すると同時に、夫の葛藤解決方略を媒介して、夫および妻の結婚満足度に間接的に影響すると考えられる。また、妻の場合も同様に、妻の親密度は直接的に妻の結婚満足度に影響すると同時に、妻の葛藤解決方略を媒介して、夫および妻の結婚満足度に間接的に影響すると考えられる。

## 方 法

### 被調査者と手続き

台湾人の夫婦を対象者とした。686 ペアに質問紙を配布し、そのうち 253 ペアから回収した。回答不備を除いた結果、有効回答数は 173 ペアとなった。郵送調査法で調査を行った。調査時期は 2003 年 3 月であった。

### 調査内容

フェース項目、親密度 (20 項目)、葛藤解決方略リスト (22 項目)、結婚満足度 (14 項目) からなる質問紙を利用した。質問紙は夫用と妻用を用意し、内容は同じものとした。

フェース項目 年齢、学歴、職業、結婚年数、子どもの数、収入を調査した。

親密度 利 (2000) の親密度尺度(MIS; Marital Intimacy Scale)の一部使用した。感激、感心、親しい感情、理解の気持ちという 4 つの下位因子のそれぞれについて 5 項目を使用した。各項目に対して、「非常にそう思う」(4 点) から「まったくそう思わない」(1 点) の 4 段階で評定させ、得点が高いほど親密度が高くなるよう得点化した。具体的な質問項目は表 1 に示した。

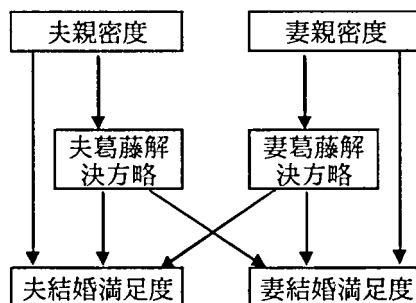


図 1 夫婦間の親密度、葛藤解決方略と結婚満足度との関係

表1 親密度の質問項目

No	質問項目
1	相手の方が、家庭のためにより多く努力をした。
2	相手は、家庭のために、一般の人の我慢できる範囲を超えたストレスを負っている。
3	私は、相手のしてくれたことに報いるようにできるだけ努力する。
4	ここ数年間私のためにしてくれたことを思い出すと、感動してしまう。
5	相手がとてもやさしくしてくれたので、それに応えないといけないと感じる。
6	一緒に多くの苦境をのりこえてきた。
7	二人には共通の話題が多い。
8	多くのことを一緒に経験した。
9	二人きりの時間を楽しんでいる。
10	私は互いの愛情表現の仕方を気に入っている。
11	自分の足りない部分について、相手から学ぶことができる。
12	相手の配偶者としての誇りを持っている。
13	こんなに性格の良い配偶者をもって、うれしく思っている。
14	時間が経つほど、相手の優れた部分をさらに感じる。
15	私の親類たちは、相手の他人との付き合い方を賞賛している。
16	私たちはお互いの要求を完全に理解できている。
17	私たちはお互いのことを信頼しあっている。
18	私たちはお互いに本当の気持ちを伝えあっている。
19	私たちはお互いのことを人生の中で一番大切な人と思っている。
20	たとえ言葉に出さなくてもお互いの気持ちがよく分かる。

表2 葛藤解決方略の質問項目

No	質問項目	方略
1	自分の希望、考え方、気持ちを相手に十分に伝える。	統合
2	自分の考え方を受け入れてくれるように、理由を挙げて、相手を説得する。	統合
3	交換条件を出す。	統合
4	妥協し合って、受容できる点を探す。	統合
5	はっきり言わず、ほのめかす。	懐柔
6	好意を示し、自分の考え方を受け入れるようお願いする。	懐柔
7	相手のことを気にせず、自分のしたいことをする。	支配
8	泣いたり怒ったりして、不平不満を伝える。	支配
9	相手に行動を変えるように、命令したり強制したりする。	攻撃
10	相手を脅す。	攻撃
11	口げんかをする。	攻撃
12	相手をたたいたり、殴ったりする。	攻撃
13	相手に合わせるように、自分の考え方を変える。	同調
14	喧嘩を避けることで、二人の関係を維持する。	回避
15	友人や同僚に頼んで二人の仲を取り持ってもらう。	第三者介入
16	専門のカウンセラーからアドバイスをもらう。	第三者介入

葛藤解決方略 福島・大淵(1997)によると、葛藤解決方略は以下の7つに分類できる。1つ目は統合方略であり、当事者間で情報を交換したり、問題を明確化しようとしたり、相互に満足できる解決策を探る行動からなる。2つ目は懐柔方略であり、当事者が相手の感情を刺激しないよう、間接的に自分の願望を伝えようとする試みである。3つ目は支配方略であり、自分の立場や要求を強く主張するもので、自分の利害を最優先する行動である。4つ目は攻撃方略であり、責めたり脅

したりすることがこれにあたる。5つ目は同調方略であり、相手の要求に全面的に従う行動である。6つ目は回避方略であり、相手との直接的な対立を避ける試みである。7つ目は第三者介入方略であり、当事者以外の人を借りて葛藤解決を図る試みである。これを基に、筆者が解決方略に関する質問項目（16項目）を作成した。「いつもそうした」（4点）から「そうしたことがなかった」（1点）の4段階で評定させ、得点が高くなると各方略の使用頻度が高くなるよう得点化した。具体的な質問項目は表2に示した。

結婚満足度 周（2002）の結婚満足度尺度の一部（10項目）と筆者が新たに加えた4項目からなる全14項目を使用した。各項目に対して、「非常にあてはまる」（4点）から「まったくあてはまらない」（1点）の4段階で評定させた。得点が高くなると結婚満足度が高くなるよう得点化した。なお、逆転項目は採点基準を逆にした。具体的な質問項目は表3に示した。

## 結 果

### 尺度構成

親密度 夫のデータと妻のデータを別々に因子分析（主因子法、プロマックス回転。以下の因子分析は全て同じ）したところ、その結果は類似していた。そのため、夫と妻のデータを全て込みにして因子分析を行った。因子負荷量が.40以上で、2因子以上で.40以上の負荷量を示さず、他因子の負荷量との差が.10以上となる項目のみを残すようにしたところ、2因子が抽出されたが、因子間相関はやや高く（.56）、因子の解釈も困難であった。利用した尺度はもともと4つの因子から構成されていたので、因子数を4に指定し、もう一度因子分析を行ったが、得られた4因子間の相関も高かった（.44～.75）。親密度を因子別に利用することにはかなりの無理が生じるため、1つにまとめて捉えることとした。なお、20項目のクロンバックの $\alpha$ 係数を算出したところ、.94と高かった。

表3 結婚満足度の質問項目

No	質問項目	逆転項目
1	二人の関係は安定している。	
2	私たちの結婚生活は、愛情と思いやりに満ちている。	
3	相手は私を緊張させる。	*
4	たとえどんな困難があっても、相手のそばから離れない。	
5	結婚生活で、私の欲求は満たされている。	
6	結婚生活で、私は寂しくなる。	*
7	私の結婚生活は価値のないものである。	*
8	結婚生活の雰囲気は単調でつまらない。	*
9	私の結婚生活は充実している。	
10	私たちは、別居あるいは離婚する可能性がある。	*
11	相手との結婚を後悔している。	*
12	もう一度人生をやりなおせたら、私は独身でいたい。	*
13	もし生まれ変わっても、私はまた相手と結婚したい。	
14	全体的に言えば、私は結婚生活に満足している。	

注. 逆転項目欄に\*が記載されている項目は逆転項目

葛藤解決方略 夫のデータと妻のデータを別々に因子分析した結果、両者に差が見られた。夫では5因子が抽出され、妻では6因子抽出されたが、その違いは、夫では回避・同調の因子が抽出されなかった点である。元々想定していた質問項目に回避・同調の各方略が1項目ずつしかなかったため、因子が抽出されにくかったと考えられる。それ以外では共通した因子構造が見られたため、夫と妻ではほぼ同様の因子構造が見られたと解釈し、夫と妻のデータを全て込みにして因子分析を行った。因子負荷量が.40以上で、2因子以上にまたがって.40以上の負荷量を示さず、他因子の負荷量との差が.10以上となる項目のみを残すようにしたところ、表4に示したとおり、5因子が抽出された。第1因子には統合方略の項目のみがまとまったため、「統合」因子( $\alpha=.83$ )と命名した。第2因子は、複数の方略の項目で構成されたが、いずれも交渉に関するものと解釈できるため、「交渉」因子( $\alpha=.66$ )と命名した。第3因子は支配方略と攻撃方略からなるため、「支配・攻撃」因子( $\alpha=.62$ )と命名した。第4因子は回避方略と同調方略からなるため、「回避・同調」因子( $\alpha=.62$ )と命名した。第5因子は第三者介入の項目のみがまとまったため「第三者介入」因子( $\alpha=.42$ )と命名した。なお、因子間相関は表5のとおりとなった。

表4 葛藤解決方略に関する因子分析

質問項目 各項目の方 No 略の種類	因子負荷量					共通性
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	
1 統合	.86	-.12	.09	.03	-.01	.73
2 統合	.86	.08	.02	-.10	.00	.71
4 統合	.57	.19	-.05	.15	-.01	.54
6 懐柔	.14	.64	-.10	.16	.02	.54
5 懐柔	-.08	.59	-.04	.07	.07	.33
3 統合	.22	.57	-.06	-.15	-.02	.36
9 攻撃	-.14	.50	.35	-.12	-.06	.49
8 支配	.15	-.08	.76	.03	-.01	.56
11 攻撃	.05	-.11	.63	.04	.06	.37
7 支配	-.17	.29	.41	.03	-.03	.34
14 回避	-.03	-.02	-.02	.75	-.09	.54
13 同調	.04	.03	.09	.62	.07	.44
15 第三者介入	-.03	.02	.02	-.01	.77	.60
16 第三者介入	.02	.04	.01	-.04	.44	.20
因子寄与	2.48	1.86	2.18	1.75	0.84	

注. 質問項目のNoは表2に対応している

表5 葛藤解決方略の因子間相関

因子	1	2	3	4	5
1					
2	.29				
3	.05	.38			
4	.51	.25	-.04		
5	.00	.01	.12	.08	

結婚満足度 夫のデータと妻のデータを別々に因子分析した結果には明確な差がみられなかった  
ので、夫と妻のデータを全て込みにして因子分析を行った。その結果、2 因子が抽出されたが、因  
子間相関が高かったため (.74)、因子数を 1 に指定し、因子分析を再度実施した。因子負荷量が.40  
以下になった項目 3 を除き、13 項目が残った。この 13 項目のクロンバックの  $\alpha$  係数を算出したと  
ころ、.93 と高かった。以上より、結婚満足度は 1 因子で捉えることとした。

表 6 夫の親密度，葛藤解決方略，結婚満足度との間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7
1. 夫親密度							
2. 夫統合	.33 ***						
3. 夫交渉	.05	.26 ***					
4. 夫支配・攻撃	-.09	.06	.37 ***				
5. 夫回避・同調	.26 ***	.49 ***	.17 *	.04			
6. 夫第三者介入	-.03	-.08	.02	.17 *	-.09		
7. 夫結婚満足度	.67 ***	.47 ***	.03	-.19 *	.25 ***	-.15 *	

注. \*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , † $p<.10$

表 7 妻の親密度，葛藤解決方略，結婚満足度との間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7
1. 妻親密度							
2. 妻統合	.32 ***						
3. 妻交渉	.09	.39 ***					
4. 妻支配・攻撃	-.28 ***	.15 *	.29 ***				
5. 妻回避・同調	.08	.33 ***	.23 **	.08			
6. 妻第三者介入	-.14 †	.07	.05	.06	.13 †		
7. 妻結婚満足度	.70 ***	.32 ***	.09	-.28 ***	.07	-.16 *	

注. \*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , † $p<.10$

表 8 夫と妻の親密度，葛藤解決方略，結婚満足度との間の相関係数

	夫親密度	夫統合	夫交渉	夫支配・ 攻撃	夫回避・ 同調	夫第三者 介入	夫結婚満 足度
妻親密度	.51 ***	.22 **	.02	-.05	.16 *	.00	.45 ***
妻統合	.33 ***	.54 ***	.24 **	.22 **	.40 ***	.02	.22 **
妻交渉	.11	.20 **	.48 ***	.21 **	.12	.15 *	.03
妻支配・攻撃	-.14 †	.04	.28 ***	.39 ***	.10	.09	-.22 **
妻回避・同調	.05	.24 **	.06	.14 †	.27 ***	.02	.06
妻第三者介入	.02	.01	-.03	-.04	-.04	.05	-.01
妻結婚満足度	.45 ***	.27 ***	.03	-.09	.18 *	-.13	.57 ***

注. \*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , † $p<.10$

表9 夫および妻の各得点の平均値 (SD)

	夫 (n=173)	妻 (n=173)
親密度	2.94 (0.56)	2.73 (0.65)
統合	2.74 (0.79)	2.87 (0.77)
交渉	1.84 (0.52)	1.91 (0.56)
支配・攻撃	1.57 (0.47)	1.82 (0.52)
回避・同調	2.36 (0.74)	2.33 (0.74)
第三者介入	1.04 (0.17)	1.04 (0.15)
結婚満足度	3.58 (0.43)	3.43 (0.53)

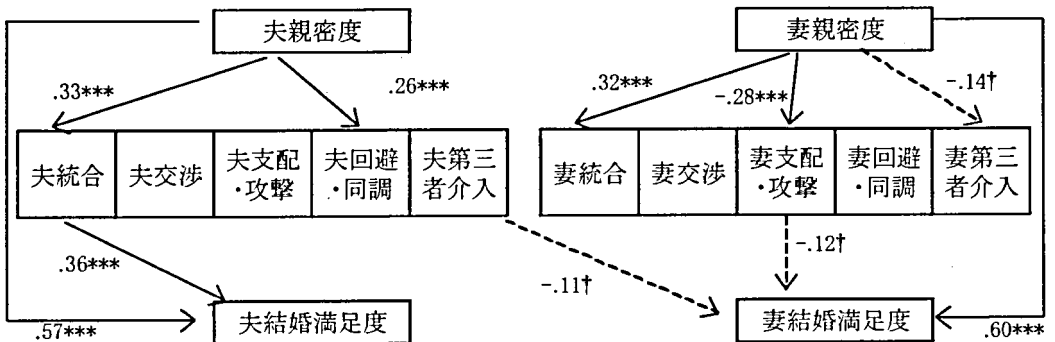
注. 各得点は、該当する質問項目の得点とを項目数で割って算出した

夫と妻の各変数との間の相関

夫の各変数間の相関係数を計算したところ、表6のとおりとなった。同様に妻の各変数間の相関係数を計算したところ、表7のとおりとなった。また、各変数について、夫の変数と妻の変数の相関係数を計算したところ、表8のとおりとなった。

夫と妻それぞれの得点

夫と妻それぞれの親密度、結婚満足度、及び各葛藤解決方略の使用の平均値 (SD) をまとめたところ、表9のとおりとなった。なお、それぞれの得点は、該当する質問項目の総得点を項目数で割って算出した。夫婦はペアとしてデータをとったので、親密度、結婚満足度、及び各葛藤解決方略の使用に関して対応のある t 検定を行った。その結果、親密度は妻より夫の方が有意に高かった ( $t(172) = 4.56, p < .001$ )。葛藤解決方略のうち、統合方略および支配・攻撃方略に関しては夫より妻の方が使用頻度が有意に多かった ( $t(172) = -2.33, p < .05$ ;  $t(172) = -5.76, p < .001$ )。結婚満足度に関しては、妻より夫の方が有意に高かった ( $t(172) = 4.34, p < .001$ )。



注1. \*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$  † $p < .10$

注2. 図中の数値は標準偏回帰係数

図2 夫婦の親密度、葛藤解決方略、結婚満足度の関係



## 親密度、葛藤解決方略と結婚満足度の関係

第1ステップとして、夫の親密度から夫の葛藤解決方略へのパス、および妻の親密度から妻の葛藤解決方略へのパスを想定し、第2ステップとして、夫の親密度、夫の葛藤解決方略と妻の葛藤解決方略から夫の結婚満足度へのパス、および妻の親密度、夫の葛藤解決方略と妻の葛藤解決方略から妻の結婚満足度へのパスを想定したパス解析を行った。その結果のうち、有意もしくは有意傾向のパスがみとめられたものをまとめた結果、図2のとおりとなった。

## 考 察

本研究の目的は、結婚満足度に及ぼす親密度と葛藤解決方略の影響を明らかにすることであった。具体的には、夫の親密度は夫の結婚満足度に直接的に影響すると同時に、夫の葛藤解決方略を媒介して、夫および妻の結婚満足度に間接的に影響すると仮定した。また、妻の場合も同様に、妻の親密度は妻の結婚満足度に直接的に影響すると同時に、妻の葛藤解決方略を媒介して、夫および妻の結婚満足度に間接的に影響すると仮定した。

まず、夫の親密度から夫の結婚満足度への影響力に関しては、仮定したとおり、直接影響するパスが確認された。また、仮定したとおり、葛藤解決方略を媒介にしたパスも確認された。具体的には、夫の親密度から、夫の統合方略の使用を媒介して結婚満足度に影響を及ぼしており、親密度が高くなると統合方略をよく使用するようになり、結婚満足度が高くなる傾向にあることが確認された。その他、夫の親密度が高くなると回避・同調方略を使用する頻度が高くなることが確認されたが、この方略を媒介にして結婚満足度に影響するパスは確認されなかった。一方、仮定していた、妻の葛藤解決方略から夫の結婚満足度へのパスは確認されなかった。

妻の親密度から妻の結婚満足度への影響力に関しても、仮定したとおり、直接影響するパスが確認された。これは夫にみられたパスと同様であった。また、仮定したとおり、葛藤解決方略を媒介にしたパスも確認された。具体的には、妻の親密度から、妻の支配・攻撃方略の使用を媒介にするパスがみられ、親密度が高くなるほど、支配・攻撃方略を使用する頻度が少なくなり、結婚満足度が高くなる傾向にあることが確認された。その他、妻が親密度を高く感じるほど、統合方略を使用する傾向、および第三者介入方略を使用しない傾向がみられた。ただし、これらの方略の使用から妻の結婚満足度への影響力は見られなかった。その他、仮定していたとおり、夫の葛藤解決方略から妻の結婚満足度へのパスも確認された。具体的には、夫の第三者介入方略の使用から、妻の結婚満足度への負の影響がみられ、夫が他人に頼んで葛藤を解決しようとする、妻は不満を抱くことが確認された。

以上より、当初仮定していたパスのほとんどで有意な影響力が確認されたが、妻の葛藤解決方略から夫の結婚満足度への影響力は確認できなかった。この理由として、妻の葛藤解決方略の使用を夫がどう認知しているかを扱っていなかったことが挙げられる。実際、夫婦の葛藤解決方略と結婚満足度の関連を検討した Kurdek (1995) は、葛藤解決方略に関して、本人と相手の両面から評価

させて捉えている。具体的には、夫の葛藤解決方略は夫が報告した葛藤解決方略と妻が認知した夫の葛藤解決方略の平均値で計算されている。このように、葛藤解決方略の使用頻度に関して、本人の評価と配偶者からの認知の2側面から捉えて検討する必要がある。さらに、本研究では、本人の葛藤解決方略および結婚満足度に影響を及ぼす要因として、本人の親密度のみを扱っているが、相手の親密度に関する認知もこれらに影響を及ぼすと考えられる。そのため、今後の課題としては、配偶者の感情や行動に関する認知も考慮に入れて、検討していくべきであろう。

また、本研究では親密度から葛藤解決方略を介しての結婚満足度への影響力を検討するため、この3変数のみを扱った。しかし、どの葛藤解決方略を使用するかは、親密度以外にも葛藤の原因等からも影響を受けると考えられる。そのため、これらの変数も考慮に入れ、さらに詳しい検討が必要と考え、これも今後の課題とする。

## 引用文献

- 福島 治・大淵憲一 1997 紛争解決の方略 大淵憲一（編） 紛争解決の社会心理学（応用社会心理学講座3） ナカニシヤ出版 Pp.32-58.
- 周 玉慧 2002 夫妻間ソーシャルサポート方略の使用 台湾行政院國家科學委員會專題研究計畫報告 未発表
- Kurdek, L. A. 1995 Predicting change in marital satisfaction from husbands' and wives' conflict resolution styles. *Journal of Marriage and the Family*, 57, 153-164.
- Lemieux, R., & Hale, J. L. 2000 Intimacy, passion and commitment among married individuals: Further testing of the triangular theory of love. *Psychological Reports*, 87, 941-948.
- 利 翠珊 2000 婚姻親密感情の内涵與測量 中華心理衛生学刊, 12, 29-51.
- 大淵憲一 1991 対人葛藤 中島義明（編） 心理学辞典 有斐閣 Pp. 548.
- Prager, K. J. 1991 Intimacy status and couple conflict resolution. *Journal of Social and Personal Relationships*, 8, 505-526.